

Ein Elefant stöhnt in der Drogerie: „Bitte fünf Meter Heftpflaster.“ „So viel?“ „Leider, ich war in einem Porzellanladen.“ (Fuhrmann (Hrsg.) 1998: 205)

(薬局の前で象がうめいている：「絆創膏を5メートルほど下さい。」「そんなにたくさんも?」「陶器店でけがをしたんだ。」)

## 1. はじめに

ドゥーデン『ドイツ語イディオム辞典』(Drosdowski/Scholze-Stubenrecht 1992)によると、ドイツ人が「狸あるいはもぐらのように寝ている」(schlafen die Deutschen wie ein Dach oder wie ein Marmelotier)ならば、ぐっすり寝込んでいるということである。しかし、日本人が「狸寝入り」しているというとき、決してぐっすり寝込んでいるわけではない。寝ているどころか、聞き耳を立てているのである。日本語では「鳥の行水」というが、ドイツ語では「猫の洗い」(Katzenwäsche)である。ドイツ語で「犬と猫のように暮らす」(leben wie Hund und Katze)というとき、それはハッピーではない。仲が悪いということである。日本語でいう「犬猿の仲」である。足に「魚の目」ができるのと歩くのに不自由するが、ドイツ語では「鶏の目」(Hühneraugen)という。お腹がすいてたまらないとき、日本語では「背中とお腹の皮がくっつきそう」と言うが、ドイツ語では「狼の飢えを持つ」(einen Wolfshunger haben)である<sup>1)</sup>。

日本語とドイツ語、いずれの言語においても、動物名を構成要素とするイディオム表現は数多い。もちろん、それらの動物すべてが、実際に日本、あるいはドイツ語圏に生息しているわけではない。中には「竜」(Drache)といった架空の存在もある<sup>2)</sup>。日独両言語において、多くの動物名には、否定的な意味合いが付着しており、肯定的な意味合いで使われるものは極めて少ないようである<sup>3)</sup>。

本論考では、日独両言語における動物名を構成要素とするイディオム表現を比較・対照する。日本語母語話者によるドイツ語イディオム学習・教授法について、何らかの示唆を引き出すことが目標である。ドイツ語学習の背景をなすドイツ学に関する事項、ランデスクンデに関して考えることも、もう一つの目標である。

作業の手順としてまず、日独両言語のイディオム辞典から、どれだけの動物名がイディオム表現に登場してくるのか、その数を確認する。そして個々の動物名に関して、どれだけのイディオム表現が収録されているのかを確認する。本来的には、すべての

動物名を構成要素とする日独両言語におけるイディオム表現を比較・対照するのが目標であるが、本論考では、パイロット的な調査として、「鼠」と"Mau"および"Ratte"を構成要素とするイディオム表現を比較・対照する<sup>4)</sup>。

## 2. 資料について

日独両言語において、どのような動物名がどれだけイディオム表現の構成要素として出現しているのかを確認するため、ドイツ語についてはフリーデリヒ『現代ドイツ語イディオム辞典』(Friederich 1966)のXXV. Tier (S.414-462)の項を調べた。個々の動物名を構成要素とするイディオム表現そのものは、ドゥーデン『ドイツ語イディオム辞典』(Drosdowski/Scholze-Stubenrecht 1992)から収集した。日本語については『成語林』(尾上(監修)1992)を資料源とした。この辞典にあがっている動物名の数を確認し、さらに個々の動物名を構成要素とするイディオム表現の数を確定した。

## 3. 資料の分析(1)

### 3.1 統計的数値

フリーデリヒ『現代ドイツ語イディオム辞典』(Friederich 1966)のXXV. Tier (S.414-462)の項には、動物の身体部位を表す語が構成要素となっているイディオム表現も収録されている。たとえば、"Flugel" (翼)、"Schnauze" (鼻面)、"Schnabel" (嘴)といったものである。これらは、動物名そのものではないので、除外した。その結果全部で65の動物名が確認できた<sup>5)</sup>。

それら65の動物名を構成要素とするイディオム表現そのものは、ドゥーデン『ドイツ語イディオム辞典』(Drosdowski/Scholze-Stubenrecht 1992)から収集したのだが、一番数が多いのは、"Hund" (犬) ("Pudel" (3) と "Schlosshund" (1) を含む) を構成要素とするイディオム表現である(43)。以下、"Pferd" (馬) (28) ("Gaul" (2)、"Ross" (5) および "Schimmel" (1) を含む)、"Kuh" ((雌) 牛) (23) ("Kalb" (6)、"Ochsen" (4) および "Stier" (2) を含む)、"Maus" (鼠) (19) ("Ratte" (3)、"Mäuschen" (2)、"Mauseloch" (1)、"Mäusemelken" (1) および "Mausen" (1) を含む)、"Katze" (猫) (18)、"Affe" (猿) (16)、"Fisch" (魚) (16) ("Sardinen" (1) を含む)、"Bock" ((雄) 山羊) (12) ("Ziege" (1) を含む) となっている<sup>6)</sup>。

『成語林』(尾上(監修)1992)に見出し語として挙がっている動物名は全部で132である。これらの動物名を構成要素とするイディオム表現で、一番数が多いのは、「馬」を構成要素とするもので、152ある。以下、多い順にあげると、「犬」(111)、「牛」(88)、「魚」(87)、「鳥」(75)、「猫」(65)、「鼠」(56)、「兎」(53)、「虫」(48)となってい

る。

### 3. 2 統計的数値に基づく比較

動物名の数の点でいえば、日本語にはドイツ語におけるよりも 2 倍以上の動物名が登場している。ドイツ語のイディオム表現の構成要素となっている動物名と日本語のイディオム表現の構成要素となっている動物名を見比べてみると、3 つの集合に分けて考えることができる。ひとつは、ドイツ語にあって日本語にないもの、もうひとつは日本語にあってドイツ語にないもの、そして、両言語に共通して登場しているものの 3 つである。

日本語にあってドイツ語にないものは、152 マイナス 65 の 87 ということになる。たとえば、「虎」(Tiger)、「亀」(Schildkröte) といったものであるが、数が多いので、すべてを列挙することはしない。

ドイツ語にあって日本語にはないものは、"Bär" (熊)、"Bock" ((雄) 山羊)、"Eichhörnchen" (栗鼠)、"Esel" (ロバ)、"Gans" (鶩鳥)、"Grille" (蟋蟀)、"Hummel" (マルハナバチ)、"Hyäne" (ハイエナ)、"Käfer" (カブト虫)、"Kamel" (駱駝)、"Luchs" (大山猫)、"Motte" (蛾)、"Nachtigall" (ナイチンゲール)、"Pute" (七面鳥)、"Sardinen" (鯛)、"Stint" (キュウリ魚)、"Storch" (鶴) である。日本に生息していなかったし、現在も生息していない動物であれば、イディオム表現にも登場してこないということは、納得できるであろう。たとえば、"Nachtigall" (ナイチンゲール) である。日本に生息しているにもかかわらず、イディオム表現には登場していない動物については、どう考えたらいいのであろうか。たしかに"Bock" ((雄) 山羊) は、日本に生息しているが、一般に人目に触れることがない。南の離島に於いて飼育され、放し飼いされているのがほとんどではないだろうか。従って、それほど一般には親しみのある動物とは言えないため、イディオム表現に取り込まれることはなかったのではないだろうか?"Bär" (熊) についても、アイヌの人々にとっては近しい動物であったといえるようであるが、一般の日本人にとってはそれほどなじみのある動物ではなかったのではないか?"Grille" (蟋蟀) や"Motte" (蛾) は、日本にも存在するが、イディオム表現には登場してこない。"Grille" を構成要素とするドイツ語のイディオム表現 ("Grille fangen", "jemandem die Grille vertreiben/austreiben") において"Grille"は「奇妙な考え」という意味で使われているのが興味深い。日本人にとって蟋蟀が秋の夜にロマンチックな雰囲気醸し出す存在として認識されているのと対照的といえる。蟬の鳴き声を含めて、「虫の音」に対する感じ方が日独に於いて異なっているといえよう。

両言語のイディオム表現に共通して登場する動物名の数は、上述のドイツ語のイディオム表現に登場している動物名 65 から、日本語に登場していない上述した"Bär"等 17

を差し引いた残り 45 ということになる。日独両言語に共通して登場してきている、日本あるいはドイツ語圏に生息していない動物がある。たとえば、"Löwe"（ライオン、獅子）、"Elefant"（象）、"Geier"（秃鷲）Geier である。もちろん蜘蛛は日本にもドイツにも生息しているが、人を死に至らしめるほどの猛毒を持った"Tarantel"（毒蜘蛛）は、生息していない。こういった動物名を構成要素とするイディオム表現は、どのような経由でそれぞれの言語に入ってきたのであろうか？

#### 4. 資料の分析（2）

前節で日独両言語のイディオム表現に登場する動物名を3つの集合に分けたが、本節では、この3つの集合について、比較考察していく。

##### 4. 1 比較（1）：両言語に共通して登場する動物名を構成要素とするイディオム

日独両言語において同じ動物名を構成要素とするイディオム表現については、それが同じ慣用的意味を表現しているのか、そうでないかを確認していくことになる。また、動物が有しているどの特徴が慣用的意味の中心となっているかに注意する。

"Aal"（鰻）を構成要素とするイディオム表現は、日独両言語において、鰻がぬるぬるしてつかみどころがない、という特性が意味の中心をなしている（「鰻に荷鞍」((wie einen Sattel auf einen Aal auflegen)、「sich winden/krümmen wie ein Aal」（鰻のように身をくねらす）、「glatt wie ein Aal sein」（鰻のようにぬるぬるしている））。ドイツ語では未熟な者、経験が少ない者を"Gelbschnabel"（黄色嘴）あるいは"Grünschnabel"（緑の嘴）というが、日本語でも同様である（嘴が黄色い）。人が長い行列をなしているのを、ドイツ語では"Schlange stehen"と表現するが、日本語でも同様に、「長蛇の列（をなす）」(eine Reihe wie eine lange Schlange (bilden))という。「蛇」は、胴体の太さに比較して、体調が長いということ、そして列が折り返し曲がっている様子を、蛇が胴体をくねらしているのと重ねているのだろう。目尻の「鳥の足跡」は、とりわけ若い女性にとっては大いに気になるものだが、ドイツ語では"Krähenfüße"（鳥の足）といい、「跡」という要素はなく、そしてまた、女性についてのみいわれるわけではない。ドイツ語の"das Hasenpanier ergreifen"（大急ぎで逃げ出す）は、日本語では「脱兎の如く逃げる」となる。日本語では「尾（尻尾）を振る」（あるいは「胡麻をする」）というが、ドイツ語でも"mit dem Schwanz wedeln"（尾を振る）という<sup>7)</sup>。

ドイツ語の"wie ein Hund verrecken"（犬のようにくたばる）は、日本語では「犬死に」に対応するように思われるが、そうではない。ドイツ語の表現は、惨めな死に方をする、という意味であり、日本語が死ぬことの意味、意義に重きを置いた表現であるのに対して、死に様に焦点を当てている。その意味では、「偽の友達」であるといえよう。

日本語には、ヨーロッパ諸言語から取り込まれた言い回しも存在する。そのようなものは、当然ながら、表現の上でも、意味の上でも、対応している。たとえば、「猫の首に鈴を付ける」と"der Katze die Schelle umhängen"、「大山鳴動して鼠一匹」と"Der Berg kreiβte und gebar eine Maus"、「豚に真珠」<sup>8)</sup>と"Perlen vor die Säue werfen"といったものである。

#### 4. 2 比較(2): 一方の言語にのみ登場する動物名を構成要素とするイディオム

##### 4. 2. 1 ドイツ語にのみ登場する動物名を構成要素とするイディオム

該当する動物名は、上述したように、"Bär" (熊)、"Bock" ((雄)山羊)、"Eichhörnchen" (栗鼠)、"Esel" (ロバ)、"Gans" (鶩鳥)、"Grille" (蟋蟀)、"Hummel" (マルハナバチ)、"Hyäne" (ハイエナ)、"Käfer" (カブト虫)、"Kamel" (駱駝)、"Luchs" (大山猫)、"Motte" (蛾)、"Nachtigall" (ナイチンゲール)、"Pute" (七面鳥)、"Sardinen" (鰯)、"Stint" (キュウリ魚)、"Storch" (鶴) であるが、日本語との対照で興味深いものをいくつか取り上げてみよう。

"jemandem einen Bären aufbinden" (誰かに熊を背負わせる) というのは、日本語で言えば「法螺を吹く」ということになるだろう。あるいは「逃がした魚は大きい」といった意味合いで、事実とは異なることを、さも本当らしく話す、ということである。同じく「熊」を構成要素とするイディオム表現"jemandem einen Bären dienst erweisen" (誰かに熊の奉仕を行う) は、その人のためを思って行ったことが、かえってその人の害になってしまった、という場合に使われる。日本語の「情けは人のためならず」ということわざの新しい解釈 (人に情けをかけることはその人のためにならない) に通じる点がある。"das Fell des Bären verkaufen, ehe man ihn hat" (熊を捕らえる前に、熊の毛皮を売る) は、日本語では「熊」ではなく「狸」となり、「捕らぬ狸の皮算用」ということになる。

「適材適所」の反対、つまり「猫に鯉節」ということを、ドイツ語では「雄山羊を庭師にする」(den Bock zum Gärtner machen) と表現する。山羊が庭園に植えた植物を食べてしまうということである。好物を目の前にしては、自制がきかないのは、山羊や猫だけでなく、人間についても言えることであろう。"den Bock melken" (雄山羊の乳を搾る) といっても、雄山羊から乳がでる道理はない。全く無意味なことをするということである<sup>9)</sup>。

「1. はじめに」で述べたように、"Grillen fangen" (蟋蟀をつかむ) や"jemandem die Grillen vertreiben/austreiben" (蟋蟀を追い出す) といった言い回しにおける Grille (蟋蟀) は「奇妙な考え」を意味する。

"die Nachtigall singen lehren wollen" (ナイチンゲールに歌い方を教える) という表現は、その道の大家に当該のことを教えようとする、つまりは無駄なことをする、とい

う意味である。日本語には「釈迦に説法」、「孔子に論語」、「河童に水練」、「猿に木登り」等、類似の表現が数多くある。"was dem einen sin Uhl, ist dem andern sin Nachtigall"（一方にとってフクロウであるものが、他方にとってはナイチンゲールである）とあるように、ドイツ語では同じ鳥であるフクロウとナイチンゲールが対比されているが、日本語でいえば「十人十色」「蓼食う虫も好き好き」ということになろうか？あるいは「鯛の頭も信心から」「鼻糞も尊（とうと）みがら」といった表現が意味としてはより近いのかもしれない<sup>10)</sup>。

ドゥーデン『ドイツ語イディオム辞典』には、"Fisch"（魚）を構成要素とするイディオム表現が 15 収録されている。日本語の場合『成語林』には「魚」（うお、さかな、ぎょ）そのものを構成要素とするイディオム表現が 87 収録されている。「鯛」「鯛」「鰻」という個別の魚の名前を構成要素とするイディオム表現も数多い。ドイツ語は、"Aal"（鰻）、"Hecht"（梭子魚）、"Sardinen"（鯛）、"Stint"（キュウリウオ）の 4 つに関して、それぞれ 1 つずつが収録されているにすぎない。その一つである "wie die Sardinen in der Büchse"（缶詰の中の鯛のように）というの、ぎゅうぎゅう詰めの状態ということであり、日本語では「鮪詰め」ということになる<sup>11)</sup>。

"jemandem läuft eine Gänsehaut über den Rücken"（誰かの背中に鶩鳥の肌が走る）という言い回しの意味は、"jemanden schaudert"（ぞっとする）ということあり、日本語では「鳥肌が立つ」が対応する表現であろう。しかし、日本語で「鳥肌が立つ」部位といえば、背中よりも両腕というのが普通ではないだろうか。もちろん、背中にも鳥肌は立っているのであろうが、見えないので、そのような理解になっているのだろう<sup>12)</sup>。

#### 4. 2. 2 日本語にのみ登場する動物名を構成要素とするイディオム

日本語にのみ登場する動物名は、海驢、蛇、蟻等 87 であることは、上述した。以下では、ドイツ語との対照で興味深いものをいくつか取り上げるに留める。

ドイツ語では黙って口をきかないことを "stumm wie ein Fisch sein"（魚のように黙っている）というが、日本語では「貝になる」あるいは「石のように押し黙る」という。ドイツ語には "Muschel"（貝）を構成要素とする言い方はない。"Fischaue"（魚の目）もそうであるが、ドイツ語において、魚は一般に生気がないもの、死んだ状態と連想されているようである。ドイツ人たちが生きた魚を目にすることが決してないというわけではないのだが。

「亀」を構成要素とするイディオム表現の数は 11 とそれほど多くはない。「亀」は「鶴」と対をなして、目出度いもの、長寿の象徴となっているが、実際に「亀の甲より年の功」をはじめとして亀が長命であることに基づく表現が数多い。ドイツ語では "Mit der Zeit wird man klug"（時とともに賢くなる）という具合に客観的な表現となる<sup>13)</sup>。

「亀」と「すっぽん」は、似ているようであるが、イディオム表現の世界におけるその取り扱いには、大きな差がある。「月とすっぽん」という表現が示すように、雲泥の差を強調するとき用いられ、しかも低い評価がなされているのである。ドイツ語は、動物のたとえを用いずに、"so verschieden wie Tag und Nacht"（昼と夜のように異なる）あるいは"ein Unterschied wie Tag und Nacht"（昼と夜ほどの違い）と表現する。

「海老で鯛を釣る」に登場する「海老」および「鯛」いずれもドイツ語のイディオム表現の構成要素としては登場しない。ドイツ語では、海の生き物ではなく、"mit Speck fängt man Mäuse"（ベーコンで鼠を捕らえる）という具合に、豚の肉を加工したものを餌にすることになる。

レーリヒ『ことわざ的な言い回しの大辞典』には、"Papiertiger"（張り子の虎）という表現が挙げられている（Röhrich 1991/92: 1139）が、ドゥーデン『ドイツ語イディオム辞典』には載っていない。日本語には「虎」に関するイディオム表現が数多い（『成語林』には 61 挙げられている）。日本語ではひどく酔って暴れたりすることを「虎になる」という。ドイツ語では泥酔状態にあることを"blau sein"（青くなっている）、泥酔（深酒）することを"zu tief ins Glas gucken/schauen"（コップの底深く覗く）という。泥酔状態で暴れて手に負えない状態に対する表現はないようである。日本語においては中国の故事に由来して「虎の威を借る狐」という。ドイツ語の場合は、イソップ物語に由来すると考えられるが「ライオンの皮をきたロバ」（ein Esel in der Löwenhaut）である<sup>14)</sup>。

「竜」は、そもそもは架空の存在であり、しかも、中国由来のものといえる。ドゥーデン『ドイツ語イディオム辞典』およびフリーデリヒ『現代ドイツ語イディオム辞典』のいずれにも"Drache"に関するイディオム表現は載っていない。レーリヒの辞典には 12 の表現が挙げられている。"Hausdrache"という俗語的な表現があるが、これは恐妻家を意味し、「山の神」といった感じである。「逆鱗に触れる」という言い回しにある逆鱗は、竜の鱗のことを意味するが、ドイツ語でこれに直接対応するイディオム表現はないようである。"jemanden sehr ärgern"（誰かを非常に怒らせる）とでもいうしかないであろうが、"jemandem auf den Schwanz treten"（誰かの尻尾を踏む）という言い回しが意味的に近いとも言える。

#### 4. 3 比較 (3)

この節では、同じ慣用的意味を持つイディオム表現で、一方の言語においては動物名を含むが、他方の言語では動物名を含まないものを取り上げる<sup>15)</sup>。

##### 4. 3. 1 ドイツ語では動物名が登場するが、日本語ではそうでない

日本語では頑固者を「石頭」というが、ドイツ語では"stur wie ein Bock"（雄山羊のように頑迷である）という。後述するように、"Bock"から派生された動詞、形容詞のいず

れも「頑迷さ」を意味の中心としている。

"tanzen die Mäuse, wenn die Katze aus dem Haus" (猫が外出していないとき、鼠はダンスをする) は、日本語では「鬼の居ぬ間に洗濯」ということになる。「鬼」は動物か人間か判然としないが、明白に動物とは言えないので、この項で取り上げる<sup>16)</sup>。

"wie die Katze um den heißen Brei herumschleichen" (猫が熱いお粥の周りを回るように) というのは、ドイツ語では優柔不断、遲疑逡巡しているということを意味している。直訳的には「猫舌」あるいは「あつものに懲りてなますを吹く」と取られそうであるが、日本語では「お茶を濁す」というのが近い。

#### 4. 3. 2 日本語では動物名が登場するが、ドイツ語ではそうでない

日本語の「虻蜂取らず」という言い回しには、ドイツ語では"sich zwischen zwei Stühle setzen" (2つの椅子の間に座る) が対応する。そして「いたちごっこ」は、"Teufelskreis" (悪循環) がほぼ同じことを意味している。「馬の耳に念仏」あるいは「馬耳東風」は、"in den Wind reden" (風に語りかける) ということになる。「泣きっ面に蜂」は、自らの意志が介在するかしないかの違いがあるが、ドイツ語では"aus dem Regen in die Traufe kommen" (雨から雨樋の下に入る) が対応する表現であろう。「鰻登り」は、ドイツ語ではイディオム表現としては対応するものがない。"in die Höhe schnellen/klettern"と表現することになるのか。

#### 4. 4 比較(4) 派生について：ドイツ語

この節では、日独両言語のイディオム表現の構成要素となっている動物名からの派生語を取り扱う。

##### 4. 4. 1 派生名詞

「1. はじめに」で述べたように、動物名の多くは、否定的な意味で、転用的に人間について使われている。とりわけ、そのような否定的な価値判断を集約していると思われるのが、接頭辞として用いられる"affen-" (猿の一)、“hunde-" (犬の一)、“sau-" (雌豚の一) という動物名から派生した接頭辞である。これら3つの動物名は、複合名詞を作るときにも、同様の否定的な意味を強調する働きをする。"Affenhitze" (猛暑)、“Hundekälte" (極寒)、“Sauwetter" (悪天候) 等がその例である。

"Affen" (猿)、“Hund" (犬)、“Sau" (雌豚) のように、強調の接頭辞として辞典に見出し語として取り上げられるほどではないが、ほかにも類似の機能を持った動物名がある。"Bärenhunger" (腹ぺこ)、“Wolfshunger" (腹ぺこ) における"Bär"や"Wolf"がそうである。このふたつは、ほとんどもっぱら"Hunger" (飢え) と結びついている。"Elefantengedächtnis" (象の記憶力：記憶力がいいこと)、“Elefantenhochzeit" (象の結婚式：大きな存在が一体となること、たとえば2つの巨大企業が合併したりすること)、



"Löwenanteil" (ライオンの分け前：大きな分け前)、"Löwenmut" (ライオンの勇気：大胆さ) といった語においては、"Elefant"、"Löwe"は、非常に大きな、強大なといった意味を持っている。"Bienenfleiß" (蜜蜂の勤勉さ：非常に勤勉であること)、"Elefantenhaut" (象の皮膚：厚い皮膚、鉄面皮)、"Hasenfuß" (兔の足：さっさと逃げ出す臆病者)、"Hasenherz" (兔の心臓：小心者)、"Ochsentour" (牛の旅：長い遅々とした行程)、"Schafskopf" (羊の頭：愚かな者)、"Schneckengang" (蝸牛の歩み)、"Schneckenlinie" (蝸牛のライン：螺旋)、"Schneckenpost" (蝸牛の郵便：郵便が遅いこと)、"Schneckentempo" (蝸牛の速さ：のろい歩み、蝸牛の歩み、牛歩)、"Storchgang" (鶴の歩み：ギクシャクした歩み) といった語における動物名は、当該動物の特定の性質や行動を固定的にとらえて意味内容としている。

"Fischauge" (魚の目のように冷たくすわった円い目 (『独和大辞典』744 頁))、"Froschauge" (突き出た目、出目 (『独和大辞典』789 頁))、"Luchsauge" (鋭い目 (『独和大辞典』1384 頁)) は、いずれも人間の特定の目を意味しているのだが、どのような目であるかは、それぞれの動物のイメージに依っている。"Hühnerauge" は、上述したように (「1. はじめに」)、日本語では「魚の目」である。ついであるが、ドイツ語では "Froschauge" (蛙の目) であるが、日本語では「出目金」という具合に、金魚と結びついてイメージされている。また、ドイツ語では "Froschperspektive" (蛙の視野) と一語で表現されているが、日本語では「井の中の蛙、大海を知らず」という言い回しとなる。

最後に、動物行動学的な知見はどうなっているかについては知らないのだが、カラスの習性を意味内容としているものに "Rabeneltern" (鳥の両親)、"Rabenmutter" (鳥の母親)、"Rabenvater" (鳥の父親) (いずれも子供に対してひどい仕打ちをする親) がある。同様の習性を持つ鳥は他にもいるようであるが、カラスは雛が孵って二、三日すると雛を見捨ててしまう、という俗信に由来する語のようである (DUDEN 1989: 1206)。日本語では、自立を促すために子供を谷に突き落とすという「獅子の谷落とし」という表現が、おおよそ意味的に対応しているといえよう。

#### 4. 4. 2 派生動詞

派生動詞がどのような意味内容を持っているか、それが当該動物のどのような特性に依拠したものであるかについてみていこう。"Luder" (死肉、腐肉) は、フリーデリヒ『現代ドイツ語イディオム辞典』では、項目として取り上げられているが、生きた動物ではないという理由で、本論文の対象とはしていないのだが、その名詞から派生した "ludern" (だらしない生活をする、(鳥獣を) えさでおびき寄せる) という動詞に、さらに接頭辞を付して派生した "verludern" ((生活・人生などを) めちゃめちゃにする) という動詞がある。こういったいわば二次的な派生動詞は、考察の対象外とした。

ドゥーデン『ドイツ語汎用辞典』(DUDEN 1996)で調べると、23の動物名から派生された動詞としては以下の27がある。

aalen (のらりくらりする)、äffen (人まねをする、ひとをからかう)、böckeln (雄山羊のにおいがする)、bocken (強情を張る)、dachsen (ぐっすり寝る)、fischeln (魚のにおいがする)、fischen (魚をする)、flöhen (蚤を捕る)、hechten (梭子魚が飛び上がるようにジャンプする)、kalben (仔牛を産む)、kalbern (仔牛のように振る舞う)、kuhhandeln (牛商いをする、政治取引をする)、luchsen (注意深く窺う)、mäuseln (鼠の鳴き声をまねる)、mausen (ちよろまかす)、ochsen (牛みたいに働く、詰め込む)、pudeln (ぱちやぱちや水をはねる)、raupen (さなぎからかえる)、rossen (雄馬が発情する)、sauen (豚が子を産む)、schlängeln (蛇行する)、stieren (雄牛が発情する)、storchen (こうのとり歩きをする)、vögeln (交尾する)、wieseln (イタチのように速く走る)、wölfen (狼が子を産む)、wurmen (虫が嘔むようにちくちく痛む)

#### 4. 4. 2. 1 造語的特徴

これらの動詞の造語的側面についていうならば、単純動詞と複合動詞に分かれる。といっても複合動詞は"kuhhandeln"の1語のみであるが。それ以外の22は、単純動詞である。

単純動詞については、同じ動物名から派生された動詞に2つあるものが注目される。<böckeln, bocken>、<fischeln, fischen>、<kalben, kalbern>、<mäuseln, mausen>の4つの対である。これらの動詞の対は、形態上の違いが意味の違いに対応している。

#### 4. 4. 2. 2 統語的特徴

派生動詞が、自動詞か他動詞かという点で分けてみると、自動詞は19である(aalen, böckeln, bocken, dachsen, fischeln, hechten, kalben, kalbern, kuhhandeln, luchsen, mäuseln, ochsen, pudeln, rossen, stieren, storchen, vögeln, wieseln, wölfen)。そして、他動詞となっているものは10である(äffen, fischen, flöhen, luchsen, mausen, raupen, sauern, schlängeln, vögeln, wurmen)。自動詞、他動詞両方の用法を持つものもある(luchsen, vögeln)。再帰動詞としての用法があるものが3つある。なかでもschlängelnは、再帰動詞としての用法のみしかない(aalen, bocken, schlängeln)。そしてböckeln, fischelnの2つは非人称動詞である。

#### 4. 4. 2. 3 意味的特徴

これらの動詞は、意味内容の点からは、5つの部類に分かれる。

第1の部類は、当該動物の習性、行動、外的特徴を意味内容としているものである(aalen, böckeln, bocken, dachsen, fischeln, hechten, luchsen, mausen, pudeln, raupen, rossen, sauern, schlängeln, stieren, storchen, wieseln, wurmenがこの部類に属する)。

第 2 の部類は、当該動物の出産、生殖(交尾)活動を意味内容とするものである (kalben, ochen, pudeln, rossen, sauen, stieren, vögeln, wölfen)。これらの中でも"vögeln"は、鳥類のみならず、人間を含む多くの動物に関しても使われる点で、一般動詞化しているともいえる。

第 3 の部類は、何らかの目的で当該動物を捕獲したり、取り除くことを意味する動詞である (fischen, flöhen, raupen)。

第 4 の部類は、当該動物の行為を人間の側が何らかの目的で模倣することを意味内容とする動詞である (äffen, mäuseln)。

第 5 の部類は、当該動物の習性、行動、外的特徴が本来の意味内容を成していたのであろうが、現在では、転義的な用法が主となっているものである (aalen, äffen, bocken, dachsen, luchs, mausen, pudeln, schlängeln, wurmen)。

#### 4. 4. 3 派生形容詞

##### 4. 4. 3. 1 造語的特徴

動物名に"-haft"、"-ig"、"-isch"、"-lich"、"-ern"といった接尾辞を付して派生形容詞を造っているタイプがある。こういった形容詞は、当該動物の特徴を意味内容としており、さらに人間にその特徴が転用して適用される場合もある。接尾辞による派生の例外が"elefantös"であるが、これは外来の接尾辞(-ös)を利用している。

これらの接尾辞を用いて派生された形容詞以外は、すべて本来は独立した語を合成した複合形容詞である。その多くは、名詞詞+形容詞というタイプである。形容詞+過去分詞 (mottenzerfressen)、名詞+現在分詞 (tierliebend) がおのおのひとつずつある。

ひとつだけだが"fuchsteufelswild"は、3つの独立語(名詞+名詞+形容詞)から成っている。

##### 4. 4. 3. 2 統語的特徴

形容詞という品詞の持つ統語的特徴は、それが付加語的、あるいは述語的のいずれに用いられるかということになるだろう。しかし、ここで対象となっている派生形容詞については、付加語的、述語的のいずれとしても用いられ、そしてさらには副詞としても用いられ得る。

##### 4. 4. 3. 3 意味的特徴

101個の派生形容詞は、意味内容の点からは、5つの部類に分けることができる。

第 1 の部類は、当該の動物の特徴をその意味内容としているのである。しかしながら、具体的にどの特定の特徴が意味内容を成しているかは、明確ではない。どの特徴であるかが明示されていないからである。たとえば"affenartig" (猿のような)、"bärenhaft" (熊のような)、"bienenartig" (蜜蜂のような)、"bienenhaft" (蜜蜂のような)、"bockig" (山

羊のような)、"elefantös" (象のような) 等、ほとんどの形容詞がこの部類に属する。もちろん、理解される意味内容は、共通の体験、知識を背景にして、ある程度の限度内で一致しているとはいえるだろう。そうでないと、言語による理解は不可能となってしまう。たとえば"elefantös"という形容詞は、象についてのイメージ、巨大、細かい動きができない、皮膚が厚い、記憶力がいい、といった意味で理解されるだろうが、そのいずれであるかは、使用される状況（コンテキスト）によって決定される。

第 2 の部類は、複合形容詞の後続の構成要素となっている形容詞が、当該動物のどのような特徴であるかを明確に指し示しているものである。"aalglatt" (鰻のようにぬるぬるして、つかみ所がない)、"bienenfleißig" (蜜蜂のように勤勉な)、"wieselflink" (イタチのように足が速い) 等がこの部類に属する。"fuchsröt" (狐の赤色)、"hechtblau" (梭子魚の青)、"hechtgrau" (梭子魚の灰色)、"rabenschwarz" (鳥の黒)、"taubenblau" (鳩の青)、"taubengrau" (鳩の灰色) 等、色彩を表している語もこの部類に属していると見なすことができる。"hechtgrau"、"taubengrau"の違いが理解できないとしても、それらが"grau"に属する色であることは明確に示されている。

第 3 の部類は、当該動物の特定の器官の特徴を意味内容としているものであるが、具体的にどのような特徴なのかは一目瞭然とはいえない。"bockbeinig" (山羊の足をもった)、"eulenäugig" (フクロウの目をした)、"fischäugig" (魚の目をした)、"hasenfüßig" (兎の足をもった)、"hasenherzig" (兎の心臓をもった)、"schweinsledern" (豚の革製の)、"storchbeinig" (こうのとりの足をもった) がこの部類に属するものである。これらの形容詞についても、もちろんある程度の不確定な部分を残しながらも、共通的な意味の核といったものはあるであろう。それらの意味は、たとえば"storchbeinig"についていえば、"storchen" (こうのとりのように歩く) と関連づけることで初めて明確なイメージが喚起されるといえる。

第 4 の部類は、当該動物の行動、特徴等が意味内容となつてはいず、人間の側からの価値付けが反映されているものである。"fischarm" (魚が少ない)、"fischereilich" (漁業に関した)、"fischreich" (魚が多い)、"mottenecht" (蛾がつかない、防虫の)、"mottenfest" (蛾がつかない、防虫の)、"mottensicher" (蛾に対して安全な、防虫の)、"mottenzerfressen" (蛾に食われてぼろぼろになった) が、この部類に属する。

第 5 の部類は、動物名が後続の構成要素としての形容詞の意味を強める働きをしているものである。その場合、動物名は、"sehr"、"viel"の意味を持つと考えてよい。とくに、"affen-"、"sau-"については、辞典に見出し語として項目がもうけられて、その意味が説明されている。"bärenstark" (熊のように強い)、"bocksteif" (雄山羊のように硬直した)、"fuchswild" (狐のように荒れた)、"hundeelend"も同様の機能を持っている。これら

の派生形容詞は、本来"stark wie ein Bär"（熊のように強い）、"steif wie ein Bock"（雄山羊のように硬直した）、"wild wie ein Fuchs"（狐のように荒れた）、"elend wie ein Hund"（犬のように惨めな）といった直喩表現が基盤になっていたものであろうが、現在では直喩であるとはほとんど意識されないといえる。とりわけ"fuchsteufelswild"（大荒れに荒れている）は、"-wild"の前に2つの名詞を重ねて強調している。副詞が追加されてはいるが、"affengeil"（非常にいい）をさらに強調した"oberaffengeil"（超いい）といった語も同様の方向にあるものと考えられることができる。

#### 4. 5 比較（3）派生について：日本語

前節においてはドイツ語のイディオム表現に登場する動物名から派生された名詞、動詞、形容詞について、詳しく見てきた。本節では、日本語のイディオム表現に登場する動物名からの派生について、見ていくことにしたいが、日本語における派生については、ドイツ語の派生とは様子が異なる。複合名詞、複合動詞、複合形容詞（連用、連体修飾語）という形になる。

##### 4. 5. 1 複合名詞

複合名詞は大きく言って2つのタイプに分かれる。一つは、2つの構成要素が「A + B」という形で並ぶものである。もう一つのタイプは、2つの構成要素が助詞「の」を介在して「A の B」という形で結合しているものである。

前者はさらに、動物名が第1番目の構成要素となるものと動物名が第2番目の構成要素となるものに分けることができる。「羊頭」「狐疑逡巡」「鴻毛」等が前者の例であるが、数は少ない。ほとんどが後者のタイプであり、「黒犬」「痩せ牛」「生き馬」等がその例である。構成要素の品詞という点からは、「動詞＋名詞」（「生き馬」、「練り牛」等）、「名詞＋名詞」（「犬猿」「犬馬」「池魚」等）、「形容詞＋名詞」（「黒犬」「老馬」「若い燕」等）という3つのタイプが区別できる。

後者（「A の B」）の例は、「猫の目」「雀の涙」「蝸牛の歩み」「生け簀の鯉」といったものである。構成要素の品詞について言うならば、「名詞の名詞」とタイプとなる。

##### 4. 5. 2 複合動詞

たとえば、「猫」から派生された動詞として「猫ばばする」「猫をかぶる」、「蛇」から派生された動詞として「蛇行する」がある。「ちょろまかす」は、「鼠」の行動と関係があると思われるが、「ちょろっとごまかす」が元の形であろうか。「狸寝入りする」「いたちごっこする」「尾ひれをつける」「鴨にする」「牙を研ぐ」「牛耳る」「鯖を読む」「虎になる」等、すべて2つの構成要素からなり、その1つが動詞というパターンである。「生き馬の目を抜く」は、もう一つのパターンといえるが、「目を抜く」という動詞表現は、「生き馬／生き牛の目を抜く」という形でしかない。

#### 4. 5. 3 形容詞／形容動詞

ほとんどが「～よう（に）」という形で、副詞的に用いられる。たとえば、「借りてきた猫のよう（に）」「猫の目のよう（に）」「ミミズがのたくったよう」「脱兎の如く」等である。

### 5. 比較（5）：「鼠」と"Maus"を構成要素とするイディオム表現

以下では、パイロットスタディとして、日本語の「鼠」を構成要素とするイディオム表現とドイツ語の"Maus"（および"Ratte"等）を構成要素とするイディオム表現を比較・対照することを試みる。

#### 5. 1 資料

日本語の「鼠」を構成要素とするイディオム表現は、『成語林』から収集したが、その数は56である。ドゥーデン『ドイツ語イディオム辞典』から収集したドイツ語の"Maus"（および"Ratte"等）を構成要素とするイディオム表現は、全部で19である。

#### 5. 2 形態・統語論的分析

ドイツ語の19の言い回しのうち、9つが文章の形を取っている（"das kann die/eine Maus auf dem Schwanz forttragen"等）。動詞句となっているものは8である（"weiße Mäuse sehen"等）。残りの2つが名詞句となっている（"weiße Mäuse"と"graue Maus"）。

日本語の57の言い回しのうち39が文章の形を取っている（「鼠が塩を引く」等）。そのほとんどは、「鼠捕る猫は爪を隠す」をはじめとして、諺である。「猫に会った鼠」のように、名詞止め表現となっているものが14ある。残り4つが句の形を取っている（「鼠に引かれそう」「ただの鼠でない」「猫の鼠を伺うよう」「濡れ鼠のよう」）。

アメリカ製のテレビ漫画"Tom & Jerry"（トムとジェリー）ではその立場は逆転しているが、ドイツ語の"mit jemandem Katz und Maus spielen"という表現にあるように、「猫と鼠」は、連想対となっている。このことは日本語においても言える。日本語の57の表現のうち11に「猫」と「鼠」の両者が含まれている。

ドイツ語のイディオム表現においては"Maus"からの派生語（"Mäuschen"、"Mauseloch"、"Mäusemelken"、"mausen"）を構成要素としている表現は5であるが、日本語においては、「頭の黒い鼠」「家の鼠」といった「鼠」を限定する表現を無視するならば、すべてが「鼠」という形が構成要素となっている。

#### 5. 3 意味論的分析

意味論的には、イディオム表現の中心的構成要素である"Maus"（および"Ratte"）と「鼠」が、生物としての鼠そのものを指しているのか、あるいは転義的に人間の意味で使われているのか、という点から分析することができる。日独両言語において、"Maus"と

「鼠」が人間の意味で使われている ("weiße Maus" (交通巡視員)<sup>17)</sup>、"graue Maus" (いかげわしい人物) や「頭の黒い鼠」「家の鼠」「ただの鼠でない」)。

鼠はたとえば猫や象と比較するならば、小さな生物である。イディオム表現においても、小さな動物であるが故にその振る舞いの結果も小さい、あるいは取るに足りない (しかし、積み重なると大事になる) と言うことが強調されている ("das kann die/eine Maus auf dem Schwanz forttragen" や「鼠が塩を引く」、"der Berg kreiβte und gebar eine Maus" や「大山鳴動して鼠一匹」)。

#### 5. 4 語用論的分析

語用論の観点から、注意すべきは、ドイツ語についていうと、「鼠」に対応する語が "Maus"、"Ratte" の 2 つあり、前者が肯定的な意味合いで使われる場合が多いのに対して、後者はもっぱら否定的な意味で使われるということである<sup>18)</sup>。いわばコノテーションに関して分業が行われているのである。日本語には「鼠」1 語しか存在しないため、両義的となっているといえる。

#### 5. 5. 分析結果に基づく考察

ドイツ語には "mit jemandem Katz und Maus spielen" (猫が鼠を弄ぶように誰かを扱う) という言い回しがあるが、日本語にはそのあとの展開とでも言える「鼠窮して猫を噛み」および「窮鼠猫を噛む」といった表現がある。「袋の鼠」といっても決して安心はできないのである<sup>19)</sup>。「袋の鼠」と言っても実際はいろんな対象、状況において使用されるのであり、「鼠」の限られているわけではない。比喩的に、万事窮し、絶体絶命の状況に追い込まれたものに言及しているのである。ドイツ語では "in der Falle sitzen" という表現することになるだろうが、表現そのものに「鼠」は登場しない。ついでながら、「袋の鼠」ならぬ "die Katz im Sack haben" (袋の猫) あるいは "die Katze aus dem Sack lassen" (袋から猫を放す) という言い回しにおける "Katze" は、本音、真相を意味しており、「袋の鼠」の意味とは全く関係がない。

日本語には鼠が狂気を意味する言い回しは存在しないが、ドイツ語には "weiße Mäuse sehen" (妄想を抱く) という表現がある。日本語母語話者が「白い鼠」という語から連想する意味内容とは異なる点に気をつける必要があるだろう。宗教的な意味合いを持った「白い鼠」と並んで、「鼠の嫁入り」は、おとぎ話に由来する。このような童話的なイメージは、ドイツ語の "Maus" と "Ratte" には存在しない。多くのドイツ語母語話者にとって "Ratte" という語は "Der Rattenfänger" (ハーメルンの笛吹男) の伝説を想起させるであろう。しかし、「ハーメルンの笛吹男」は、決してハッピーなお話とは言い難い。この中でも "Ratte" は、災害をもたらす者として出てきている。

## 6. ドイツ語イディオム学習・教授法に関する考察

"sich wie ein Elefant im Porzellanladen benehmen" (陶器店における象のように振る舞う)、  
"ein Gedächtnis wie ein indischer Elefant haben" (インド象のような記憶力を持つ)、  
"aus einer Mücke einen Elefanten machen" (蚊から像をつくる)、  
"nachtragend wie ein indischer Elefant sein"  
(インド象のように執念深い) といったドイツ語の言い回しから判断する限り、ドイツ語において「象」は、決して良いイメージを付与されてはいない。「蚊から像をつくる」(針小棒大、大げさな話をする) という言い回しにおいても身体の巨大さだけが強調されている。象が厚い皮膚を持っている (Dickhäuter, Dickfelligkeit) ため、あらゆる批判にも動じない、つまり「鉄面皮」というネガティブなイメージが支配的である。実際にそのような政治的戯画も数多く描かれている<sup>20)</sup>。日本の動物園では愛されている動物であり、人間的な感情を解する「象」いう、多くの日本人が抱いている象のイメージとはだいぶ異なっている。

「犬」あるいは「牛」のように、ペットあるいは家畜として人間と生活を共にしてきている動物も数多い。なじみとなった動物の外見、行動の特定の特徴が言語表現に取り込まれ、イディオム表現となっている。そのいわば「見立て」は、基本的には動物の外見や特徴を人間に当てはめるといふ、いわば直喩的なとらえ方 (Vergleich) であるといえる。そして、実際の言語表現は、暗喩である場合もあるし (魚の目)、直喩である場合もある (猫の鼠を向うよう)。どの局面、特徴を捉えているかは、言語によって、一致している場合もあれば、異なっている場合もある。

本論考では、網羅的、詳細な調査を行うことはできなかったが、どのような方向の調査が必要であるかについては、示すことができたのではないだろうか。動物名を構成要素とする日独のイディオム表現の比較・対照研究をさらに進めて、日独両言語の支えている文化、歴史、地理等について、言語学習を支えるバックグラウンド的知識の領域にもっと深く入り込んでいくことが、将来における課題となるだろう。

## 7. おわりに

本論考のテーマ (動物名を構成要素とするイディオム表現) を想起し、外国語学習の意義を確認するために、そして動物たちとの共生をはかっていくことの大切を考えるために、ウィットを3つ掲げて、論述を終えることにしたい<sup>21)</sup>。

Über den Zoo fliegt ein Mückenschwarm. Sagt eine Mückenmutter zu ihrem Jüngsten: „Sieh dir dort unten einmal die Elefanten an. Das sind die Tiere, die aus uns gemacht werden.“ (Fuhrmann (Hrsg.) 1998: 215) (動物園の上空を蚊の一軍が飛んでいく。お母さんが子供たちに言う。「あそこにいる象たちをごらん。あれがあたしたちの未来の姿だよ。」)



Eine Katze hockt vor dem Mauseloch. Die Mäuse haben Hunger, aber sie trauen sich nicht heraus. Auf einmal ruft die Mäusemutter: „Wauwauwau!“ Die Katze erschrickt und läuft weg. Da sagt die Mäusemutter zu ihren Jungen: „Da seht ihr mal, wie gut es ist, Fremdsprachen zu lernen!“ (Sammelt 2002: 168) (鼠の穴を猫がかがみ込んで覗いている。鼠たちは腹が空いている。しかし、穴から出て行けない。突然お母さん鼠が「ワンワン！」と叫んだ。猫はびっくりして逃げ去った。お母さん鼠が言う：「わかったかね、外国語はこういう具合に役立つのだよ！)

"Ihr Sohn hat mich >alte Kuh< genannt, was sagen sie dazu?" "Ich hab ihm schon so oft gesagt, er soll die Leute nicht nach dem Äußeren beurteilen..." (Der Witz-Cocktail 2002: 101) (あなたの子供が私に向かって「老いぼれ雌牛」といいました。どう思います？「息子にはもう何度も言い聞かせているのですが、人を見かけで判断してはいけないのだ、と。)

## 8. 注釈

1) イタリア語でも「狼の飢えを持つ」(ho una fame da lupo) というようである。そして、「魚の目」は、「山うずらの目」(occhio di pernice) である。

2) 竜」については、西洋と日本や中国におけるそのイメージには差がある。日本人は、一般に、長い胴体、長く鋭い牙を持っている竜を思い描くが、西洋人が思い描く竜は、いわば翼をもった強大なトカゲといった感じである。



たとえば、右のカリカチュア (Haitzinger, Karikaturen. München: Bruckmann, 1989, S. 61) を見られたい。

3) 植田 2000 (「ドイツ語における罵り言葉」) は、「共生言語学」(Ökolinquistik) の観点から、ドイツ語の「罵り言葉」について考えたものである。とりわけ、罵り言葉において、動物を人間の下位におくという人間中心主義が見て取れる。この点を共生言語学は批判している (Fill (Hrgs.) 1996 を参照)。

4) すなわち、第一段階の目標としては、十二支に登場する動物名を構成要素とする日独のイディオム表現を比較・対照する。最終的には、すべての動物名に関して比較・対照し、考察する予定である。

5) たとえば、日本語の「牛」に対応するドイツ語には、総称として "Rind"、その下位

語として"Bulle" (雄牛)、"Kalb" (仔牛)、"Kuh" (雌牛)、"Ochs" (去勢された雄牛)、"Stier" (雄牛) があるが、すべて「牛」という種に属するので、動物名としては1と数えることにした。

6) もちろん辞典によって、収録されているイディオム表現の数は異なる。ドゥーデン『ドイツ語イディオム辞典』には、たとえば「牛」に関しては"Kalb" (仔牛) (6)、"Kuh" (雌牛) (12)、"Ochsen" (去勢された雄牛) (4)、"Stier" (雄牛) (2)、計 23 のイディオム表現が収録されている。フリーデリヒ『現代ドイツ語イディオム辞典』には、"Kalb"(4)、"Kuh"(5)、"Ochsen"(4)、"Stier"(3)、計 16 が収録されている。キュッパ『絵入り現代ドイツ語口語辞典』(Küpper 1982) には、"Bulle" (雄牛) (33)、"Kalb"(15)、"Kuh"(66)、"Ochs"(26)、"Rindvieh" (牛) (6)、"Stier"(13)、さまざまな口語的な意味とともに、計 159 の表現が収録されている。

7) 次のウィットにあるように、「尾を振る」というのは、犬の行動に由来する表現のようだが、犬の場合は、喜びの表現であるようである。「喜び」と「へつらい」の違いは、どこにあるのだろうか。"Es geht ein Mann zum Tierarzt: "Bitte koupieren Sie sofort meinem Hund den Schwanz!" "Aber das schöne Tier! Warum? Bei Jagdhunden wie diesem ist das doch nicht gebräulich." "Das ist mir egal. Koupieren Sie meinen Hund - ja oder nein?" Nachdem dies geschehen ist, besteht der Tierarzt darauf, den Grund zu wissen. "Übermorgen kommt meine Schwiegermutter. Ich will keinerlei Kundgebungen der Freude in meinem Haus."" (一人の男が獣医を訪ねる。「すぐにこの犬の尻尾を切断して下さい。」「見事な犬ではないですか? どうしてまた? 尻尾なしの猟犬というのは普通ではないですよ。」「そんなことはどうでもいい。とにかくこの犬の尻尾を切ってくれるのか、くれないのか?」尻尾の切断が終わったあと、獣医は、どうしても理由を知りたがった。「あさって妻の母が来るんだ。喜んでいると取れるようなものは一切家にあってほしくないのだ。)」

8) 日本語本来の言い回しは「猫の小判」であろうが、現在では「豚に真珠、猫に小判」という具合に重ねて用いられることも多い。

9) 『成語林』には「木に縁って魚を求む」「畑に蛤」「木に竹を接ぐ」をはじめとして、さまざまなたとえに基づく「不可能なこと、無意味なこと」を意味する言い回しが挙げられている。

10) 日本では「フクロウ」は、「福」に通じるということで、置物として好まれているが、(北)ドイツでは「不幸」をもたらすものと考えられているようである (Drosdowski/Scholze- Stubenrecht (Hrsg.) (1992): 745)。

11) ドゥーデン『ドイツ語イディオム辞典』(1992) には"wie die Sardinen in der Büchse" という形で載っているが、フリーデリヒ『現代ドイツ語イディオム辞典』(1966) は、

"(dicht gedrängt wie die Sardinen in der Büchse" = "(dichtgedrängt) wie die Heringe (in der Tonne)" (樽の中の鯺のようにぎゅうぎゅう詰めの状態) とある。2つの辞典の刊行年には、4分1世紀の差があるが、その間に保存容器としての"Tonne" (樽) はほとんど廃れてしまったため、ドゥーデンでは"wie die Heringe in der Tonne"という形は収録されなかったのであろうか。2つの辞典に収録されているイディオム表現を時代の経過という観点から比較してみるのも興味深い。たとえば"Kuckuck" (かっこう) を構成要素とする表現は26年の間に18から8に減少している。それに対して"Sau" (雌豚) を構成要素とする表現は4から10に増えている。"Hund"、"Kuh"についても同様である。これらの語が罵り語として使われるという事実を考えると、現代社会と、その中で生きるドイツ語母語話者たちの感情世界について示唆するところがあると言えるだろう。

12) 「鳥肌が立つ」は、本来は「寒さ・恐怖・嫌悪・不気味さなどを感じたとき、肌が鳥の皮のようにつぶつぶのできた状態になることをいう」(『成語林』809頁) のだが、近年は、感動したときの表現としても用いられているようである。同様のことは、ドイツ語の"eine Gänsehaut bekommen"についても言えるようである。その実例がインターネット版 DER SPIEGEL (19. Juli 2004) の次の記事である。

RUMMEL UM "QUEEN MARY 2" "Ich hab 'ne richtige Gänsehaut" Das gigantische Kreuzfahrtschiff "Queen Mary 2" hat einen Ansturm von Schaulustigen ausgelöst. Zehntausende Frühaufsteher beobachteten das riesige Schiff bei seiner Ankunft in Hamburg. So manchem Zuschauer kamen vor Rührung gar die Tränen. (「クイーン・メリー2世号騒ぎ 「私は正真正味の鳥肌が立った」 強大な観光船「クイーン・メリー2世号は、多くの野次馬を引き寄せた。何万という人々が早起きして、この巨大船がハンブルクに入港するのを見た。中には感動のあまり、涙を流す人もいた。)

13) 「亀」といえば、日本人にとっては足がのろいものの代表として、「兎」と対比され、「ウサギとカメ」のかけっこということをしすぐにも思い浮かべる。しかし、ドイツ語では"Hase und Igel" (兎とハリネズミ) である。「ウサギとカメ」の場合、兎が慢心して、油断したことを戒めていると理解できるが、グリム童話における「兎とハリネズミ」は、ハリネズミの考え深さ、あるいは狡猾さが表に出てきていると言えるだろう。

14) 同じ意味内容を表現するのに、異なったイメージを用いている例は、数多い。たとえば、「一石二鳥」はドイツ語では"zwei Fliegen mit einer Klappe schlagen" (ひとたたきで蠅2匹) となる。このような言語によるイメージ、比喩の違いを確認し、外国語教授法に資することも、対照研究の一つの目標であり、本論考が目指すところでもある。

15) 本節(4.3)における視点にもとづく比較については豊田の論(豊田 1997)に詳しい。なお、本論考における例のいくつかは豊田から借用したものであることを断るとともに、礼を申し述べる(なお、豊田の論は筆者の指導のもとで作成されたものである)。

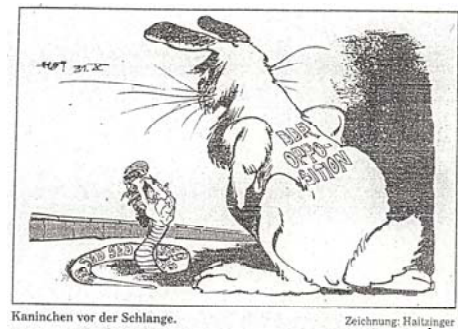
16) 「河童」や「天狗」についても同じことが言える。

17) ドイツ語とは逆に、「ねずみ取り」という日本語の表現で言われている鼠は、交通違反を取り締まるお巡りさんではなく、交通違反者のことである。"weiße Mäuse sehen" (白い鼠を見る)という表現は、「妄想を抱く」という意味であるが、他方「お巡りさんを見る」という意味でもあり得る。次のウィットは、"weiße Mäuse"が両方の意味で用いられている(ついでながら、"Kater" ((雄)猫)と"Mäuse" (鼠)という連想の作用もある)。**"Wer mit einem Kater Auto fährt, sollte sich vor weißen Mäusen hüten."** (Witzbuch 1997: 486) (二日酔いで車を運転するものは、白い鼠に気をつけなければいけない。)

クルーゲの『ドイツ語語源辞典』によると、ドイツ語の"Maus"は親指の付け根の盛り上がった筋肉をも意味していた(Kluge 1989: 468)とあるのは面白い。日本語でも、とりわけ腕の筋肉の盛り上がりや「ねずみ」と呼んでいる(少なくとも筆者の方言(徳之島方言)ではそう言っている)。また、自転車や自動車のタイヤがパンクしそうになってふくれあがっている部分も「ねずみ」と称している。

18) 次のウィットは、"Maus" (あるいは"Mäuschen") が好きな女性(恋人あるいは妻)への呼びかけとして使われるということを前提としている。**"Schatz, stimmt es, dass Nagetiere dumm und gefräßig sind?" "Aber sicher, Mäuschen."** (Der Witz-Cocktail 2002: 89)。(「あなた、齧歯類は愚かで、何でも嚙るって、本当なの?」  
「そうだよ、僕の鼠ちゃん。」)

19) ドイツ語では「猫と鼠」ではなく、"Kaninchen" (兎)と"Schlange" (蛇) **"wie das Kaninchen auf die Schlange starren"** (蛇に出くわしてすくんでいる兎のよう)という言い回しになる。立場が逆転した「窮鼠猫を嚙



む」に対応するのが、右のカリカチュアである（Badische Zeitung, 17. November 1989）。

20）たとえば、右のようなカリカチュアがある（Badische Zeitung, 22. September 1987）。

象として描かれているのは、当時の西ドイツ首相コールである。折れ曲がった針を垂らして、悔しそうに飛んでいる蜂たちは、野党の面々である。野党の批判は、コールにとっては、ちっとも痛くないのである。



21）「ドイツ語における罵り言葉」（Ueda 2000）は、「共生言語学」（Ökoluinguistik）の観点から、ドイツ語

の「罵り言葉」について考えたものである。とりわけ、罵り言葉において、動物を人間の下位におくという人間中心主義が見て取れる。この点を「共生言語学」は批判している（Fill (Hrsg.) 1996 を参照）。

## 9. 参考文献

Der Witz-Cocktail 2002: Der Witz-Cocktail. Lachen bis zum Umfallen. München: Knaur (Knaur Taschenbuch 690)

Drosdowski/Scholze-Stubenrecht (Hrsg.) (1992) : Drosdowski, Günther/Scholze-Stubenrecht, Werner (Hrsg.) , DUDEN 11. Redewendungen und sprichwörtliche Redensarten. Wörterbuch der deutschen Idiomatik. Mannheim/Leipzig/Wien/Zürich: Dudenverlag.

DUDEN 2001: DUDEN. Deutsches Universalwörterbuch. 4., neu bearbeitete und erweiterte Auflage. Herausgegeben von der Dudenredaktion. Mannheim/Leipzig/Wien/Zürich: Dudenverlag.

Fill(Hrsg.) 1996: Fill, Alwin (Hrsg.) , Sprachökologie und Ökoluinguistik. Tübingen: Gunter Narr Verlag.

Földes 1990: Földes, Csaba, Phraseologie und Landeskunde - am Material des Deutschen und Ungarischen. In: Zielsprache Deutsch, H.2; 11-15.

Friederich 1966: Friederich, Wolf, Moderne Deutsche Idiomatik. Systematisches Wörterbuch mit Definitionen und Beispielen. München: Max Hueber.

Fuhrmann (Hrsg.) 1998: Fuhrmann, Olaf (Hrsg.) , Super Kinderwitze. Niedernhausen/Ts.: Bassermann'sche Verlagsbuchhandlung.

Kluge 1989: Kluge, Friedrich, Etymologisches Wörterbuch der deutschen Sprache. Berlin/New York: Walter de Gruyter.

Mieder 1995: Mieder, Wolfgang, Deutsche Redensarten, Sprichwörter und Zitate. Studien zu ihrer Herkunft, Überlieferung und Verwendung. Wien: Edition Praesens.

尾上（監修）1992：尾上兼英（監修）『成語林』旺文社

Piirainen 1995: Piirainen, Elisabeth, Phraseologie des Japanischen - Vorarbeiten zu einer

interkulturellen Erforschung von Symbolen in der Sprache. In: Baur, R.S./Chlosta, Ch. (Hrsg.) : Von der Einwortmetapher zur Satzmetaphor. Bochum: Universitätsverlag Dr. N. Brockmeyer, 269–304.

Röhrich 1991/92: Röhrich, Lutz, Das große Lexikon der sprichwörtlichen Redensarten. Freiburg/Basel/Wien: Herder Verlag.

Sammelt 2002: Sammelt, G., Superstarke Schüler-Witze. München: Egmont Franz Schneider Verlag.

Schmidt 1972: Schmidt, Rudolf, Tierisches in unserer Muttersprache. Ein unterhaltsamer Beitrag zur deutschen Sprachkunde. Gerabronn-Crailsheim: Hohenloher Druck- und Verlagshaus.

Steindl 2003: Steindl, Michel, Tuo ku-zu fang-pi und andere Redensarten. In: Der Sprachdienst, 5/03; 166 - 172.

豊田 1997: 豊田菜摘児 「動物に関する Redewendungen 日独比較」 (広島大学文学部 1996 年度卒業論文)

Ueda 1991: Ueda, Yasunari, Schwierigkeiten beim Verstehen der deutschen idiomatischen Wendungen. Ein Kapitel im Deutschunterricht für japanische Muttersprachler auf einer fortgeschrittenen Stufe. In: Info DaF. Informationen Deutsch als Fremdsprache 18; 3–14.

植田 2000 : 植田康成 「ドイツ語における罵り言葉について－共生言語学の観点から－」 『広島大学文学部紀要』 第 60 巻、305-327 頁。

Ueda 2001: Kontrastive Phraseologie: Deutsch-Japanisch – idiomatische Wendungen mit Farbbezeichnungen als Hauptkomponenten. In: The Hiroshima University Studies. Graduate School of Letters 61; 91–110.

Witzebuch 1997: Witzebuch über 1000 Witze für junge Leute. Stuttgart: Fischer Verlag.

## 10. 資料

### 【資料 1】 ドイツ語の "Maus" (および "Ratte" 等) を構成要素とするイディオム表現

1. da[von] beißt die Maus keinen Faden ab (ugs.) : das ist unabänderlich, dagegen ist nichts zu machen  
(それからは鼠も糸一本もかじりとらない : それは変わらない、それについては何もできない)
2. das kann die/eine Maus auf dem Schwanz forttragen (ugs.) : das ist sehr wenig (雀の涙)  
(それは鼠がしっぽで運ぶことができる : それは非常にわずかである)
3. weiße Maus (ugs.; scherzh.) : Verkehrspolizist  
(白い鼠 : お巡りさん (交通巡視員))
4. weiße Mäuse sehen (ugs.) : Wahnvorstellungen haben  
(白い鼠を見る : 妄想を抱く)
5. Mäuse merken/riechen (ugs.) bemerken, daß etwas nicht ganz reell zugeht; Verdacht schöpfen

(何かが実際通りに運んでいないことを、鼠が気づく：疑念を抱く)

6. der Berg kreite und gebar eine Maus (geh.) : ein bergroer Aufwand brachte ein lcherliches, unbedeutendes Ergebnis (S.98) (大山鳴動して鼠一匹)

(山が産みの苦しみをして、鼠を産んだ：大騒ぎした結果が取るに足りないものである)

7. graue Maus (ugs.) : unscheinbare Person, Gruppe o.. (S. 274) :

(灰色の鼠：いかがわしい人物、集団)

8. mit jmdm. Katz und Maus spielen (ugs.) : jmdn. hinhalten, allzulange auf eine [letztlich doch negative] Entscheidung warten lassen (S.376) (なぶり殺し)

(誰かを猫が鼠を弄ぶように扱う：誰かを長く焦らしたあげく、不都合な決定を下す)

9. wenn die Katze aus dem Haus ist, tanzen die Muse [auf dem Tisch]: wer gewohnt ist, stndig beaufsichtigt zu werden, nutzt es aus, wenn er einmal ohne Aufsicht ist (S.376) (鬼の居ぬ間に洗濯)

(猫が外出していると、鼠が(机の上で)踊る：いつも監督されている者は、見張りがいなくなった時を利用する)

10. mit Mann und Maus untergehen: untergehen, ohne da einer gerettet wird (S.475)

(人と鼠も一緒に滅ぶ：誰も助からず、みんな滅ぶ)

11. mit Speck fngt man Muse: mit dem richtigen Lockmittel kann man bei anderen einiges erreichen (S. 671)

(ベーコンで鼠を捕まえる：ぴったりのえさで何かを手に入れる)

12. die Ratten verlassen das sinkende Schiff: die Unzuverlssigen ziehen sich von einem vom Unglck bedrohten Menschen oder Unternehmen zurck

(鼠は沈んでいく船を見捨てる：信頼できない者は、不幸に見舞われた人間や企業から手を引いていく)

13. auf die Ratten spannen (landsch.) : sorgfltig aufpassen

(鼠に注意する：非常に注意する)

14. schlafen wie die Ratte (S.622) : sehr tief und fest schlafen

(鼠のように寝る：非常に深く、ぐっすり寝る)

15. bei etwas Muschen sein mgen (ugs.) : bei etwas im verborgenen zuhren, zusehen mgen

(何かについて鼠であろうとする：何かをそっと聞いたり、見たりしようとする)

16. ich glaub', da dich das Muschen beit (ugs.) : du bist wohl verrckt; das kommt gar nicht in Frage

(思うに、君は鼠に噛まれたのだ：君は頭がおかしい、君のいうことは話にならない)

17. jmd. wrde [vor Scham, Angst o..] am liebsten in ein Mauseloch kriechen (ugs.) : jmd. schmt, ngstigt sich o.. ber alle Maen (穴があつたら入りたい)

(誰かは、(恥ずかしさのあまり)鼠の穴に入りたい：誰かはとつても恥ずかしい思いをし

ている)

18. zum Mäusemelken sein (ugs.) : zum Verrücktwerden, unglaublich sein

(鼠の乳を搾るようなものだ：頭がおかしくなる、信じられないことだ)

19. mausen: die Katze läßt das Mäusen nicht: wer einmal gestohlen u. ä. hat, wird es immer wieder versuchen

(S.376)

(ちよろまかす：猫はちよろまかすことをやめない：一度盗みをはたらいたものは、またそうしようとする)

## 【資料2】日本語の「鼠」を構成要素とするイディオム表現

1. 鼠が塩を引く：ささいなことでも何回もくり返すと大変なことになるということ。びくびくしながらこっそり行うさまのたとえ。

2. 鼠窮して猫を噛み、人貧しゅうして盗みす：追いつめられたねずみが進退きわまって猫にかみつくように、人も貧しさにどうしても耐えられなくなると、盗みをはたらくようになる。

3. 鼠と木挽きは引かねば食われぬ：鼠は食物をとって巣穴まで引いてこなければ生きていけないし、製材を業とする人は毎日木材を引かなければ生計をたてることができない。

4. 鼠捕らずが駆け歩く：ろくな働きをしない者が忙しそうに走り回るたとえ。

5. 鼠捕る猫は爪を隠す：

6. 鼠無きを以て捕ざるの猫を養うべからず：

7. 鼠に投げんと欲して器を忌む：

8. 鼠に引かれそう：だれもいない家の中に一人でいて、寂しく心細いさまのたとえ。

9. 鼠の尾まで霧の鞘：

10. 鼠の空死に：

11. 鼠の婿取り⇒鼠の嫁入り

12. 鼠の嫁入り：

13. 鼠は社に憑（よ）りて貴し

14. 鼠も小六十：

15. 鼠も虎の如し：

16. 鼠を収めて理閭（りりよ）を破る⇒鼠穴を収めて理閭（りりよ）を破る

17. 鼠を相るに皮あり、人にして儀なからんや：

18. 鼠を以て璞（たま）と為す：

(語中に「鼠」を含む言い回し)

19. 頭の黒い鼠：その家に住んでいてその家の者を盗む人のたとえ



20. 家に鼠、国に盗人：家の中には必ず鼠がおり、国には必ず泥棒がいるということから、程度の差はあるが、いつの世、いかなるところにも悪事を働く者が必ずいるというたとえ。
21. 家の鼠：自分が世話になっている家に迷惑をかけ害を与える者のたとえ。
22. 家を破る鼠は家から出る：家や国などを滅ぼすのは、外からの者によるよりもむしろ内部からの者によるというたとえ。
23. 急ぐ鼠は穴に迷う：
24. 急ぐ鼠は雨に会う：
25. 驥をして鼠を捕らえしむ
26. 国に盗人家に鼠：
27. 倉に住む鼠は米穀を食して楽しみ、厠に住む鼠は糞土を食して楽しむ
28. 之を用いればすなわち虎となり、用いざればすなわち鼠となる。
29. 三年になる鼠を今年生まれの猫の子が捕らえる：
30. 死にたる人は生ける鼠に及かず：
31. 史目大なれど見る事鼠に若かず：
32. 雀の上の鷹、猫の下の鼠：
33. 済んだ事を言うと鼠が笑う：
34. 雪隠の鼠は一生糞を食いて命を保つ：
35. 大山鳴動して鼠一匹：
36. ただの鼠でない：
37. 時に遇えば鼠も虎になる：
38. 虎狼は防ぎ易く鼠は防ぎ難し：
39. 鳴く猫鼠捕らず：
40. 鶏をして夜を司らしめ、狸をして鼠を執らしむ
41. 猫が鼠を捕るようなもの：
42. 猫に会った鼠：
43. 猫の鼠を伺うよう：
44. 猫の鼻先の物を鼠が狙う：
45. 猫の前の鼠：
46. 猫の前の鼠の昼寝：
47. 袋の（中の）鼠：
48. 用いるときは鼠も虎となる：
49. 社の鼠：

5 0 . 鷺の巢を鼠が狙う

5 1 . 窮鼠猫を嚙む

5 2 . 首鼠両端：どちらとも決心が付かず、ぐずぐずしていること。

5 3 . 鼠穴を収めて理間（りりよ）を破る：小さな害をなくそうとしてもっと大きな肝心なものをだめにしてしまうことのたとえ。

5 4 . 二鼠藤を嚙む：この世に生きる人間には刻々と死が近づいていることをいうたとえ。

5 5 . 濡れ鼠のよう：着衣のまま全身がずぶぬれになるさま。

5 6 . 二十日鼠も獣の内：いくら小さくて弱いものでも、同じ獣の仲間にかわりはないということ。

5 7 . 偃鼠（えんそ）に飲むも満腹に過ぎず：人はその分に応じて満足することが大切だというたとえ。

## 1 1 . ドイツ語レジュメ

### **Kontrastive Phraseologie - idiomatiche Wendungen**

#### **mit Tierbezeichnungen als Hauptkomponenten im Deutschen und Japanischen -**

Yasunari UEDA

In der vorliegenden Arbeit werden idiomatiche Wendungen mit Tierbezeichnungen als Hauptkomponenten im Deutschen und im Japanischen kontrastiv untersucht. Die gesammelten Daten werden zuerst statistisch verglichen. Dann werden sie morpho-syntaktisch, semantisch und pragmatisch kontrastiv analysiert, damit aufgrund von Analyseergebnissen einige interkulturelle Aspekte herausgearbeitet und einige sprachdidaktische Überlegungen angestellt werden können.

Sowohl im Deutschen als auch im Japanischen gibt es eine Reihe von idiomatichen Wendungen mit Tierbezeichnungen als Hauptkomponenten. Von diesen Tieren als biologischen Spezies existieren einige in Wirklichkeit weder im deutschsprachigen Raum noch in Japan. Es gibt darunter auch einige imaginäre Wesen (z.B. Drache). Sowohl im Deutschen als auch im Japanischen sind Tierbezeichnungen meistens mit negativen oder nur selten positiven Konnotationen verbunden.

Eine idiomatiche Wendung wird durch zumindest folgende fünf Eigenschaften charakterisiert: Polylexikalität, Festigkeit, Idiomatizität, Reproduzierbarkeit und Bildhaftigkeit. Beim Verstehen und Produzieren sollte vor allem auf die Verschiedenheit der Bilder, die den idiomatichen Wendungen in der jeweiligen Sprache zugrundeliegen, aufgepasst werden. In der vorliegenden Arbeit werden von diesem Gesichtspunkt aus deutsche und japanische Wendungen kontrastiv analysiert.

Auch wenn dasselbe Bild hinter einer deutschen und japanischen Wendung steckt, bedeutet dies nicht ohne weiteres, dass man die idiomatiche Bedeutung der betreffenden Wendung in der

jeweiligen Sprache leicht verstehen kann. Durch den Aspektunterschied wird das Verstehen manchmal erschwert. Im schlimmsten Fall kann die Bedeutung missverstanden werden.

Wenn in der deutschen und der japanischen Wendung jeweils ein anderes Bild verwendet wird, gilt es, sich einfach die Bedeutung der jeweiligen Wendung einzupragen. Dabei ist es wichtig und bedeutsam, sich diese verschiedenen Bilder, die der jeweiligen Wendung zugrundeliegen, bewusst zu machen, damit man interkulturelle Aspekte des Fremdsprachenlernens wahrnehmen kann. In diesem Sinne stellen idiomatische Wendungen geeignetes Lernmaterial zur Annäherung an die interkulturelle Problematik im Fremdsprachenlernen dar.

Es kann nicht bezweifelt werden, dass die Menschheit als Spezies trotz oberflächlicher Verschiedenheit die gleiche Wahrnehmungsfähigkeit besitzt. Aber was man in Wirklichkeit sieht, hängt wesentlich von unterschiedlichen Interessen ab. Und wie man die wahrgenommenen Tatsachen sprachlich zum Ausdruck bringt, wird wohl wiederum von verschiedenartigen Faktoren bestimmt.

Dass man ohne Arbeitsmühe angenehm und glücklich leben kann, ist wohl nur eine große Hoffnung. Deshalb erdenkt man sich ein Paradies, in dem einem "gebratene Tauben in den Mund fliegen". Die Bequemlichkeit im Paradies drückt man im Japanischen mit einem anderen Bild aus, nämlich "Kamo negi" (Wildente mit Schnittlauch). In Japan gilt das Fleisch der Wildente als Leckerbissen.

Bei der Versprachlichung der gleichermaßen wahrgenommenen Tatsache spielen das Gemeinwissen und die gemeinsamen Erfahrungen der jeweiligen Sprachgemeinschaft eine entscheidende Rolle. Dies kann man besonders an den metaphorischen Bildern, die idiomatischen Wendungen zugrundeliegen, erkennen.

Wenn man das Wort "Haus" hört, kann man darunter im Deutschen und Japanischen gleicherweise eine Wohnmöglichkeit verstehen, aber die konkrete Vorstellung wird sicher anders sein, weil z.B. schon die Bauweise und das Baumaterial u.a. unterschiedlich sind. Hinzu kommen noch die mit diesem Wort assoziierten Vorstellungen. Dadurch kommt man, genau genommen, nicht sicher zum gleichen Verständnis, obwohl man sich schon ungefähr verständigen kann.

Diese Problematik steckt nicht nur hinter den idiomatischen Wendungen, sondern prinzipiell hinter allen Wörtern. Solche Probleme werden in der Linguistik unter dem Stichwort "Konnotation" behandelt. Bei der Diskussion über die Konnotation sollte man zwischen individuellen und überindividuellen Konnotationen unterscheiden. Die letzteren, aufgrund deren man zunächst die mitgemeinte Bedeutung eines Wortes versteht, schlagen sich im Sprachsystem nieder. Eine konkrete Vorstellung aber bekommt man erst durch eigene Erfahrungen und dadurch wird diese allgemeingültige Konnotation individuell modifiziert und bereichert. Konnotationen können sich darum im Laufe der Zeit ändern. Andersrum

gesagt, es ist sehr wichtig für das interkulturelle Verständnis, die jeweils zu der Zeit gültigen Konnotationen von Wörtern zu verstehen.

Zum Schluß seien drei Witze zitiert, um unsere Thematik noch einmal bewusst zu machen und die Nützlichkeit und Bedeutung des Fremdsprachenlernens und die Wichtigkeit des Erlernens von idiomatischen Wendungen zu betonen.